

感じさせられるが、若く新しい教員がスタッフに加わることで、学科に新鮮なエネルギーも与えてもらえる。今後も時代の要請に応えられるように、これからも教員・職員と学生が一丸となって、本学科の新たな歴史を創っていく所存である。

生物資源管理学科のこの1年

須戸 幹

生物資源管理学科長

学生の動向

生物資源管理学科は、2016年3月に卒業生57名を送り出した。就職した学生は37名で、うち国、県職員と高校・中学教諭を含めた公務員は8名であった。就職希望者に対する内定率は93%で例年並みであった。

今年度の就職活動は例年と異なり、「学業に専念する時間を増やす」ことを目的に全体を後ろ倒しに、具体的には3月より企業説明会の解禁、8月に選考開始、10月に内定のスケジュールで実施された。しかし実際は、申し合わせに拘束されない企業から早めの内定をもらった学生の多くが8月以降も就職活動を継続し、希望がかなわなかった場合は10月以降も活動を継続した。結局、元の目的とは正反対で「就活の時間が極端に増えた」結果となった。内定を出した企業が学生に就活を終わるように圧力をかける「オワハラ」も流行語になったほどである。

このことは就活が教育実習や公務員試験に重なっただけでなく、動植物やフィールドを対象とするため、調査や研究の時期をずらすことができない学科の学生や教員には非常に大きな負担になった。就職を希望する学生は大変だったと思うが、就職先を見つけ、卒論も立派にやり遂げた学生を例年以上に評価したい。また来年度は選考開始時期が6月になることも決まっており、朝令暮改に振り回される学生を大変気の毒に思う。

一方、大学院には本学の11名をはじめ、京大に4名、岐阜大に1名と、合計16名が進学することになった。これは卒業生の3割近くに達し、本学科で学んだことを基礎として、より勉学・研究に勤しみたいと考える学生が多いことを示している。多くの学生は、修士課程修了後には専門的研究員として企業に就職するが、一部の学生はさらに博士課程に進むかもしれない。研究者への道は険しいものがあるが、行き詰った時に相談できる相手が県立大学にもいることを忘れずに、大いに頑張っていたきたい。

入試倍率は前期試験が3.6倍、後期試験が12.1倍で、例年並みの結果になった。全国的に文高理低の傾向で農学系もその範ちゅうにある。さらに県内の私学に昨年度から農学部が新設されたが、生物資源管理学科は環境と農業をキーワードにした学科として、受験生から一定の評価を得ていると考えている。今後は文科省の方針により、各大学では「国際」「地域」に関連した学部学科の再編が活発になると予想される。私たちの学科は、滋賀、琵琶湖という地域に密接にかかわりながら、生物生産と生物機能を適切に制御、管理する知識と知恵を学び、循環型社会の形成を目指す魅力ある学科であることを、これまで以上に発信していく必要があるだろう。

学科の動向

昨年度3名の先生方が定年退職されたことに伴い、今年度新たに大久保教授、畑助教(いずれも4月より)、平山准教授(6月より)が赴任された。最初の1年間は講義の準備、研究体制の構築、学生気質の把握など手探りの状態であったと推察するが、年度末には3名の方ともすでに学科組織や学生とのコミュニケーションに十二分に対応されており、素晴らしい方々に来ていただけたと感謝している。

各先生方の専門と本学での抱負は別項で述べられると思うが、従来の専門にとどまらず、幅広い知見と意欲をもって、教育と研究に多大の貢献をしてくださることを期待している。

環境科学研究科

環境動態学専攻のこの一年

鈴木 一実

環境動態学専攻長

環境動態学専攻の2015年度を振り返り、学生の動向、教員の動きおよび専攻の運営について取りまとめました。

1)学生の動向

2015年度も環境動態学専攻における学生の出入りは比較的順調でした。2015年4月の博士前期課程への入学者は20名と募集人員を2名上回る結果となり、博士後期課程へは5名が入学または進学しました。2016年3月の博士前期課程の修了者は11名で、内訳は生物圏環境研究部門：2名、生態系保全研究部門：6名、生物生産研究部門：3名でした。4月以降